

DEBUT 首長

愛媛県伊予市長 武智 邦典氏

対話で築く「癒しのまち」 松山の衛星都市から脱却

伊予市 愛媛県のほぼ中央、松山市の西南約10kmに位置し、瀬戸内海に面する。双海町など2町と2005年に合併。人口約3万8000人。

——伊予市の課題をどうとらえているか。

旧伊予市、中山町、双海町が合併して現在の伊予市となつてから8年が経過したが、いまだに合併効果が実感できないとの声が出ている。これまでの市政が地域のニーズを吸い上げていなかったからだ。

かつて伊予市の方向性は松山市の衛星都市だったが、それは太陽がメラメラ燃えて衛星を照らすことが前提だ。伊予市の人口は2040年に10年比で約3割減ると推計されている。今年を「新たな合併元年」と位置付けて独自の魅力をアピールしたい。

——目指す市の姿は。

「食と健康と癒しの町」のイメージだ。ハモやじゃこ天、クリなどの産品があり、伊予灘に沈む夕日や、桜と桃、菜の花が競演する山あいなど都会の人が「へえ」と思う景色がある。テ

ニスコートやレストラン、宿泊機能を備えた約11万㎡の施設「ウェルピア伊予」もある。例えば施設のプールを温水化して水中歩行運動に供し、地元食材で作った健康食や風呂、医師による検診を組み合わせれば面白いサービスになる。

これまで市は発信力が弱かった。ブランド構築や交流人口増加のためトップセールスを積極的に行いたい。セールスにはまじめさのほかに「よもだ」（伊予の方言で「お調子者」「いい加減」などの意味）も必要だ。私は就職前に弁当の売り子をした経験もあり、心得がある。

——公約でタウンミーティングの充実を掲げている。

市長としてやりたいことはいろいろあるが、独善ではいけないので、老若男女の色々な声を拾い上げたい。「動けば変わる。伊予市の明日」を掲げ、市民対話を続けていく。懸案となっている老朽化した市庁舎の改築問題などのテーマが一段落すれば観光やまちづくりについて話し合いたい。

対話の相手は市民に限らない。



たけち・くにのり 1957年愛媛県伊予市生まれ。75年新田高校卒業、80年瀬戸内ライン工業入社。2005年4月伊予市議初当選、09年2期目当選。前市長の引退に伴い行われた13年4月の市長選は新人2人の一騎打ちとなり、157票差で初当選。56歳。

中堅職員らを育成するため、主幹会や主査会を新たに設けて意見を聞く機会を作った。また、職員の意識改革の一歩として、首にかけている名札用の顔写真を笑顔に改めるため撮り直した。市民に接する職員がしかめっ面ではいけない。議会については、反問権の導入を提案している。

——防災強化も掲げている。

市民の命を守るのは行政最大の任務。例えば四国電力伊方原子力発電所（愛媛県伊方町）の前面海域にある断層は横にずれるため大きな津波は発生しないとされるが、不測の事態が起きないとも限らない。市は県内でいち早く防災無線を導入しているが、窓を閉めるなどして聞こえないケースも想定される。防災行政無線の戸別受信システムの導入補助を視野に、調査を始めている。市民や職員との対話は危機管理にも生きて考えている。

（聞き手は

松山支局長 入江 学）